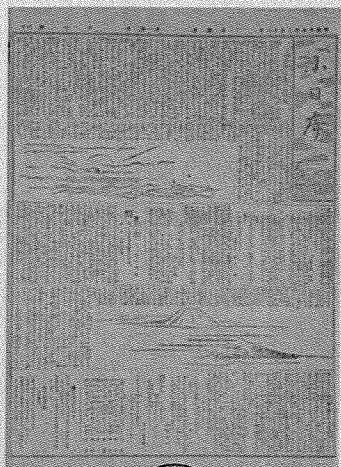


子規と「小日本」

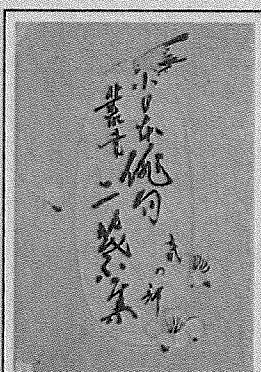
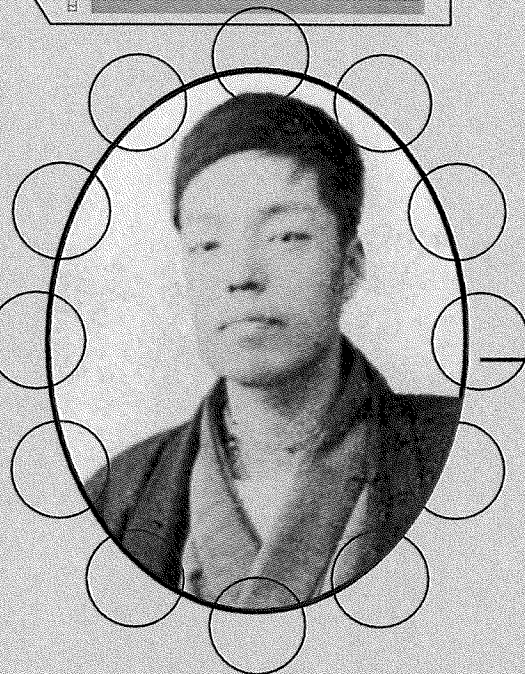
新聞界の旋風

正岡といふ奴の
一番得意の時は
「小日本」時代だった

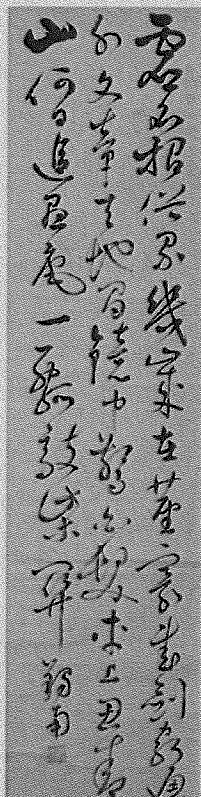
（上）正岡子規画より



新聞「小日本」創刊号 明治25年8月11日



「小日本」明治25年5月30日付録「俳句二葉集 春の部」(複製)



複製提供先(弘前市立子規記念博物館)

平成 26 年 8 月 2 日 (土) ~ 8 月 31 日 (日)
午前 9 時 ~ 午後 6 時

(展示室入場は午後 5 時 30 分まで) *会期中は無休で開館

松山市立子規記念博物館 3階特別展示室

個人 400 円、団体 320 円、65 歳以上 200 円、小中高校生 無料

特典：常設展とセットで特別企画展の観覧券を購入する場合、
特別企画展の観覧料は 2 割引・子規博友の会会員が特別企画展の
観覧券を購入する場合、特別企画展の観覧料は 2 割引

記念講演 演題：羯南の「日本」、子規の「小日本」
講師：高木宏治 氏 (陸羯南研究会・筑波大学非常勤講師)
日時：8 月 3 日 (日) 14:00 ~ 15:30
場所：子規記念博物館 1 階 視聴覚室
入場無料 定員約 100 名

THEO-INTERON

子規と「小日本」-新聞界の旋風-

今から二二〇年前の明治二十七年（一八九四）年二月十一日、ある新聞が創刊されます。その名は「小日本」。振り仮名や挿絵を配した家庭向けの文芸新聞です。「小日本」は、子規が勤める日本新聞社の機関紙「日本」の発行停止処分に備え、新たな読者を開拓するために発刊されました。その編集主任に抜擢されたのが、入社二年目の子規だったのです。

編集を任された子規は「小日本」の構成や企画、執筆交渉などに奔走します。同郷の親友である五百木瓢亭や画家の中村不折、後に子規門の有力俳人となる石井露月らが入社し、子規を支えました。同紙には作家の斎藤緑雨、硯友社の江見水陰、浅香社の金子薫園など派を超えた文士たちが寄稿し、子規自身も小説や俳句、短歌などを掲載します。また俳句募集には多くの人々が投句し、子規派の礎が築かれました。

しかし、「小日本」の発行期間は短く、同年七月十五日に廃刊となります。緊張する清国との関係に国民の関心が向いたことや、社の経済的な事情があったといわれます。子規の落胆は大きなものでしたが、「小日本」での経験は、俳誌や句集の編集をはじめとする後の文学活動に活かされるのです。

今回の特別企画展では、子規が編集主任を務めた新聞「小日本」を取り上げ、子規の仕事や紙面を彩った文士たちを紹介するとともに、「小日本」が後の子規文学に与えた影響を探ります。

記念講演

演題：羯南の「日本」、子規の「小日本」

講師：高木宏治氏（陸羯南研究会・筑波大学非常勤講師）

日時：8月3日（日）14:00～15:30

場所：子規記念博物館 1階 視聴覚室

入場無料 定員約 100名

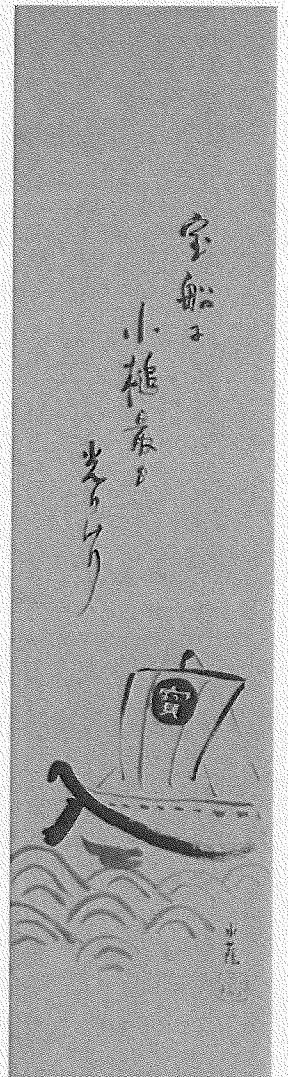
〈学芸員によるギャラリートーク〉

展示室において、担当学芸員が特別企画展の内容を解説します。

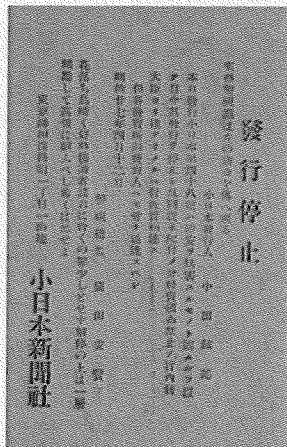
8月9日（土）、23日（土）※いずれも14時から50分程度



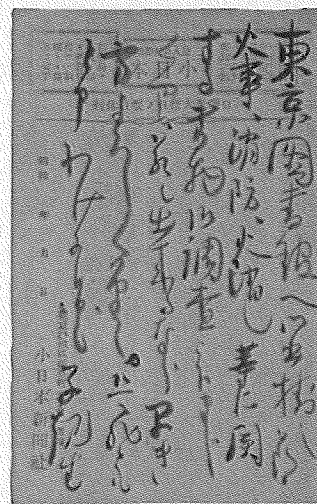
「小日本」明治27年6月23日号付録「輪船院長兵衛」第六編（個人蔵）



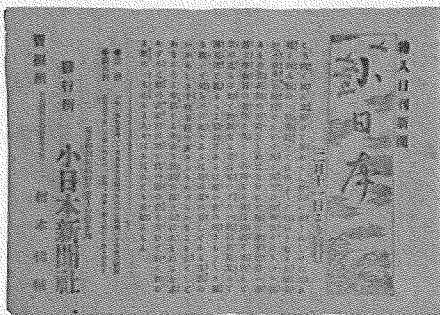
江見水陰画賛「宝船に小鶴最も光りけり」（県立神奈川近代文学館所蔵）



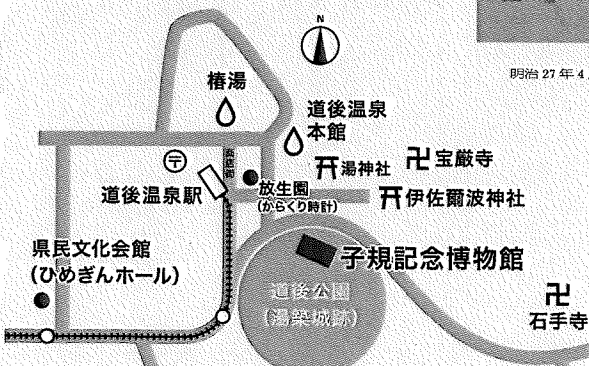
「小日本」発行停止通知 明治27年4月12日（羽島知之氏所蔵）



子規の高沢虚子あて書簡 明治27年2月17日（虚子記念文学館所蔵）



「小日本」発行予告ビラ（羽島知之氏所蔵）



道後温泉駅より徒歩約5分／道後公園駅より徒歩約5分
*公共の交通機関をなるべくご利用ください

松山市立子規記念博物館
TEL 089-931-5566 〒790-0857 松山市道後公園 1-30
施設運営・管理／株式会社レスパスコオペレーション
<http://sikhaku.lesp.co.jp/>